

宮古の鳥文化

Culture on the Birds in the Miyako Islands, Okinawa, Japan

久貝 勝盛

Kugai Katsumori

Asian Raptor Research and Conservation Network (アジア猛禽類ネットワーク)

Wild Bird Society of Miyako (宮古野鳥の会)

Abstract

Once, native people used to wake up with the birds that take off from their roosting place at dawn and sing rhythmically. They used to realize a sense of spring or the arrival of the winter by seeing migratory birds. At the same time, they have prepared to plant the crops and harvest them. For instance, they have sowed soybeans and prepared to harvest them by adapting to the autumnal or spring migration of the swallows. They have foreseen the changes of a natural environment through the migration of the birds and have adjusted their rhythm of life.

On the other hand, native people have supported their lives by catching the birds by using their own traps. The others, a dignified artistic culture, have been flowered by introducing birds of paintings, carvings, photos, literatures and music.

Some hospitals have been introducing birds' singing as a method to cure patients' heart. The culture of the birds and human beings have been intertwined. In this way, from ancient times, human beings have related closely with the birds. I wonder how the native people of the Miyako Islands related with the culture of the birds. The author has studied about the birds in the folktales, culture on the food, pets, domestic fowls, a haiku, a tanka, a poem and how native people deeply related with birds.

Key words:

Culture on the birds, folktale, haiku, tanka

はじめに

かつて人々は夜明けとともにねぐらを飛び立ち、リズムカルにさえずる鳥の声で目覚めた。鳥が渡ってくるのを見て春の訪れや冬の到来を実感した。同時に農作物の植え付けや収穫の段取りをした。例えば、ツバメの春秋の渡りに合わせて大豆の種まきや収穫の準備をしたように、人々は自然界の変化を鳥を通して予測し、それに合わせて生活のリズムも整えていったのである。

一方で人々は独自の方法で考案したワナを利用し鳥類を捕え貴重な食料にして命をつないできた。その他、絵画、彫刻、写真、文学、音楽等の中でも鳥類が取り入れられ格調高い芸術文化が開花した。いくつかの病院等では鳥の美しい鳴き声を患者に聞かせ生活に潤いを持たせ心のいやしにも利用している。これも、まさしく人間と鳥が織りなす鳥文化である。

このように大昔から人間と深く関わりを持っている鳥文化について宮古ではどうなっているのか。民話の中に出てくる鳥、食文化としての鳥、ペット、家禽（家畜）としての鳥、俳句、短歌の中の鳥、人間生活と深い関りを持つ鳥等についてまとめた。

（1） 民話の中の鳥

宮古は四方を海に囲まれた島々で台風、干ばつ等、自然災害の多い島である。その災害の度に現実的な対応と手段を取り、神への祈願も行ってきた。宮古の民話は各島々、各村々に残っていて、それらはほとんど同じものではなくて、ちがった内容のものである（仲井真、1974、沖縄民話集）。また、遠藤（2010）は数百年続いた琉球王の支配期に宮古諸島の民話は他の地域から、ごくわずかな影響しか受けずに伝承されているのではないかと述べている。それだけ宮古諸島の民話は独自性があるということになる。

仲井間は宮古の民話を以下の七つのジャンルに分けている。

- ① 世のはじまりのころの話
- ② 神としてまつられる話
- ③ 人の愛をめぐる話
- ④ かしこい者や愚か者の話
- ⑤ 地名にまつわる話
- ⑥ まじないに関する話
- ⑦ 動物にまつわる話

ここでは宮古の動物にまつわる民話の中から鳥に関する民話を二十点ピックアップし紹介する。なお、ここで紹介する民話はすべて既存の「いらぶの民話」「多良間村の民話」「城辺町史」「宮古の民話第三集、第四集、第五集（宮古民話の会）」からの引用要約、または転載である。

- ① 鷺の捨て子（佐和田、奥浜シゲ、いらぶの民話、1976、3、28）
- ② 白鳥になった継子（国仲、宮国カナ、いらぶの民話、1976、3、26）
- ③ 継子と白鳥（前里添、山口カナ、いらぶの民話、1976、3、29）
- ④ 烏（カラス）と弁当（仲地、西原マツ、いらぶの民話、1976、3、29）
- ⑤ 古いガラスと牛の角（池田常公、多良間村の民話、1981）
- ⑥ ミハギ鳩とカラスのゆがたい（前泊徳正、宮古の民話第4集、1984）
- ⑦ 鳩が見つけた井戸（佐和田、佐和田カニ、いらぶの民話、1976、7、26）
- ⑧ スズメと泡盛の始まり（佐和田、佐和田カニ、いらぶの民話、1979、8、11）
- ⑨ 雀酒屋（すずめざかや）（饒平名泰仁、多良間村の民話、1981）
- ⑩ 13羽の白鳥（佐渡山マツ、宮古の民話第4集、1984）
- ⑪ ウズラのゆがたい（与那原ママト、宮古の民話第4集、1984）
- ⑫ ウズラと野火（嘉味田マシラ、多良間村の民話、1981）
- ⑬ ユーサのゆがたい（新城メガ、宮古の民話第4集、1984）
- ⑭ 青鳩になった子供（前里財義、城辺町史、第5巻民話集、1990）
- ⑮ 魚女房（稲田浩二監修、沖縄の昔話、1980）
- ⑯ やもりと鶏（多良間の民話、1981）
- ⑰ セッカと生（い）き水（みず）（宮国岩松、多良間村の民話、1981）
- ⑱ 雲雀（ひばり）と虹と生き水（与那嶺カナス、宮古の民話第4集、1984）
- ⑲ 雲雀と生き水（前泊メガ、宮古の民話第4集、1984）
- ⑳ ツバメとカンタマシャ（下地モツ、宮古島の民話第五集、1989）

宮古の民話に登場する鳥は次の13種類である。鷺（ノスリ？）、サシバ、白鳥（シラサギ類？）、カラス（リュウキュウハシブトガラス）、ハト（キジバト）、アオバト（ズアカアオバト）、ヒバリ（セッカ）、ミフウズラ、スズメ、オオクイナ、ニワトリ、ツバメ、セキレイ。サシバについては「宮古のサシバ文化」で詳細に述べられている。是非、参照されたい。民話の中に出てくる鳥はいずれも昔から人間生活に最もクロスして生きてきた鳥たちである。しかし、より身近な鳥であるツバメの民話が少ないのは不思議である。

ここでは上記のサシバ以外の鳥について、簡単にその民話のあらすじを紹介し、その鳥の地域の方言名、言い伝え、人間との関わり等についても述べる。

1) 鷺の捨て子 (いらぶの民話、1989)

昔、親と子の二人が人に使われていた。お茶を摘みに行くときは子供をおんぶして畑の側で寝かし一生懸命仕事をした。その時、鷺(写真1)が来て子供をつかまえて飛んで行った。

それに気づいた母親は泣いて追いかけた。しかし、追いつけない。鷺は山を越え、島を越え、海を越えて行った。母親は浜に出て泣きながら這い回っていた。

鷺は松の木に止まった。その時、ちょうど、坊主が山廻りをしていて、それを見つけ、経を読んだ。鷺はその子供を離した。坊主はその子どもを拾って連れて帰った。そして、坊主の道を教えた。昔は人が亡くなったら坊主は平良から伊良部に来て経をあげていた。

その子供の坊主が伊良部に行くと、あちこち子供を探している女に出会った。その子供の坊主は持っていたお守り札をみせて母親と再会した。子供の坊主は母親を平良へ連れて帰り面倒をみた(奥浜シゲ、伊良部佐和田、1976)



写真1 ノスリ (タカ科)
(写真: 山本晃、1989, 11)



写真2 ダイサギ (サギ科) (1989, 1)

宮古ではもともと猛禽類は少ない。この民話に出てくる鷺類の種名までは分からないがもしかしら、畑や野原周辺で見られるノスリ(方言名: ヌーシャ、ヌーシ)かもしれない。あるいは海岸付近で見られるミサゴ(伊良部方言名: イズフォウタンカ)だったのかもしれない。宮古でこれまで記録されている猛禽類は以下の通りである。(タカ科 16種) ハチクマ、トビ、オジロワシ、クロハゲワシ、カンムリワシ、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、マダラチュウヒ、アカハラダカ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、オオノスリ、ケアシ

ノスリ、(ハヤブサ科6種) チョウゲンボウ、アカアシチョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、チゴハヤブサ、ワキスジハヤブサ、ハヤブサ(宮古野鳥の会、40周年記念誌、2014)。この中で方言名のついているのはサシバ(タカ、タカー)、ハヤブサ(オオビャー、城辺、平良)、チョウゲンボウ(アカビャー、城辺、平良)、アカハラダカ(サキバイダカ、城辺)、ノスリ(ヌーシャ城辺、平良、ヌーシ、下地)、ミサゴ(池間、佐良浜、イズファイタンタ、保良、イズフォウタンカ、伊良部、タンタ)の6種類である。

この民話は母親の子供に対する深い愛情と子供の親に対する熱い思いを描いた心温まる物語である。

2) 白鳥(シラサギ類、方言名: ガーナ) になった継子(いらぶの民話、1989)

再婚した夫婦にはそれぞれ女の子が一人ずついた。父親は毎晩、竿を持って魚取りに行き、翌朝に帰ってきた。二人の子供たちは寒くなると「かうずがみ」という酒を入れるカメの中にチョウチングウ(麻袋)を入れて寝かせた。

父親が海から捕ってきたニバリャ(ハタ類)は継母が料理し、自分の子供には肉ばかり、継子には骨ばかりをあげていた。ある日、継子は「お父さんの捕ってきた魚は骨ばかりで食べられない」と話した。それを聞いた父親は、その晩、海に包丁を持っていきニバリャの頭に肉ばかりを入れた。そしたら次の日、継子は「今度の魚は肉ばかりで、腹いっぱい食べたよ」と言った。

そのことを知った継母は継子を殺そうと考えた。いつものように「かうずがみ」の中で寝ていた自分の子供をおこしてカメから出し、継子はそのまま寝かした。そして沸かしてあるお湯をこのカメの中に入れた。そしたら継子は白い鳥(シラサギ類、方言名: ガーナ)(写真2)になって飛んで行った。

父親が漁から帰ったら自分の子供がいない。下の子に姉さんはどこへ行ったのかと尋ねた。妹は母ちゃんが沸かしたお湯を「かうずがみ」の中に入れたら大きな白い鳥になってお父さんを探しに海の方へ飛んで行った」と言った。父親は毎日魚捕りに海に行くといつも「ハイッ、私の子供よ、お父さんは、こんなにあなたたちのことを思っている。会いにおいで」と祈っていた。そしたら、大きいあの白い鳥が飛んできて「お父さん、お父さん、わたしはあなたの子供だから怖がらないで、何かあったら私が助けるから海に行くのを怖がらないで、私は神になったんだよ」と言った。お父さんは涙を流しながら自分の捕ってきた魚を切って白い鳥(シラサギ類、方言名: ガーナ)にあげた。別れ際に白い鳥は父親に「今、欲しいものは何か」と聞いた。父親は「私は海に行くときに着ける着物が欲しい」と言った。すると、

「お父さんが、ムムインバナ（木綿）を取ってきたら、私がきれいに機を織ってあげる」と言った。

ムムインバナ（木綿）を袋いっぱい、持っていくと白い鳥はそれを自分の首に巻いて飛んで行った。数日後、白い鳥はきれいな立派な白い、上から着ける着物を作って父親にあげた。父親は白い鳥に「いつまでも生きてお父さんを助けてね」と言って涙ながらにお礼を言った。司ンマや坊主が着ける白い着物は神様になった白い鳥が機織りして作ったということで琉球のお祈りの時は白い着物を着けるという（伊良部国仲、宮国カナ、1976）。

どこの民話でも見られる継母の継子いじめの物語である。父親と実の子どもたちとの心のこもった交流が胸を打つ。この民話に出てくるムムイムバナとは木綿のことである。かつて伊良部島の長山底あたりでは栽培していたようだ。伊良部の代表的な民謡「長山底（ながやまずく）」には以下のように歌われている。これは久松の大親邸に奉公中の伊良部島の男が自分の郷里、長山底に今を盛りの綿の花の絶景を叙し主人大親夫人を花摘みに誘う叙景と抒情を兼ねた特色ある歌である（平良、1951）。

「長山底（ながやまずく）んな イラヨーマン まかやぬ花（ぱな）まい ずびなの花（ぱな）まい さら木綿花（むむいむばな）よ じゅうしちや大親母（うぶやんま） 我（ばん）てが島参（すまんみゃ）い 木綿花むらよ」（長山底にはススキの穂が開花し、木綿が新たな花を咲かせている。大親母（身分の高い役人夫人の敬称）もいる。さあさあ、木綿の花の咲く、私の村に来てください）（私信：砂川恵吉、前泊龍英）

宮古でごく普通に見られるシラサギ類には以下の5種類があげられる。アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、クロサギ（白色型）。伊良部ではサギ類を方言でガーナ、またはイムガーナと呼ぶ。

死後にその魂が鳥へと変わる話は古くから各地に伝わる。日本神話には大和への帰路の途上で力尽きたヤマトタケルの魂が御陵（墓所）から白鳥になって飛び立ったというエピソード残っている（細川、2018、人と鳥の文化誌）。伊良部の民話に出てくる白鳥もその流れを汲むのかも知れない。ただ、宮古にはめったに白鳥は飛来しない。それ故、身近にみられるシラサギ類を登場させたのだろうか。なお、宮古の民話に登場する白鳥はすべてシラサギ類だと考えられる。

3) 継子と白鳥（シラサギ類）（いらぶの民話、1989）

昔、子供二人を残して本当の母親が死んでしまった。父親は再婚したが遠い旅に出て行っ

た。継母は使用人の男を使って二人の子供を殺そうと考えた。ある時、その使用人に「この二人の子供を人のいない離れ島に捨ててこい」と命令した。使用人は仕方なく小さな船で二人の子供を離れ島に連れて行き置き去りにした。

子供たちは人のいない離れ島で身を寄せ合っていた。そこへ亡くなった母親が大きな白い鳥になって毎晩、水と食べ物を持ってきて子供たちにあげていた。ある日、白い鳥は、帰り際に「明日、お父さんが大きな船で通るのでお父さん、お父さん」と呼びなさいと言った。

翌日、本当に大きな船が通った。子供たちは言われた通りに「お父さん、お父さん」と呼んだ。後日、お父さんは二人の子供を、その離島から救出し家に連れて帰った。

そして、お父さんは継母を殺し、親子三人仲良く暮らした(伊良部前里添、山口カナ、1976)。

この民話でも継母の継子いじめと白鳥になった実の母親が子供たちの世話をするという母親ならではの強い愛情が白鳥(シラスギ類)を通して描かれている。

4) 鳥(からす)と弁当(いらぶの民話、1989)

母親が亡くなって継母が子供たちをいじめていた。ある日継母が子供たちに「お父さんと一緒に食べるように」と弁当を持たせた。子供たちは喜んでお父さんと一緒に食べようとした。しかし、子供たちをいじているのを知っていたお父さんは「その弁当は食べるな」と言う。その時、鳥(からす)(写真3)が飛んできた。お父さんは「弁当をその鳥(からす)に食べさせて」と言った。鳥は弁当を食べた。次々と鳥が現れて弁当を食べた。すると、今まで元気だった鳥がピッウン、ピッウン、ピッウン、羽をたたいて苦しみ、とうとう死んでしまった。お父さんは「その弁当は食べるな」と言って穴を掘って弁当を埋めた。

家に帰ると継母は「よくも死なないで帰ってきたね」と思いながら「あなたたちはみんな弁当を食べたのか」きいた。子供は「はい、おいしかったから食べてきた」と言う。継母はあれは毒ではなかったのかと思い、残っていた弁当を食べ、とうとう死



写真3 リュウキュウハシブトガラス(カラス科)(2017, 10)



写真4 キジバト(ハト科)(2018, 8)

んでしまった。(伊良部仲地、西原マツ、1976)

5) 古いガラスと牛の角 (多良間村の民話、1981)

牛が死んだ。遠い所に埋めて置くと大きな角が外に出ていた。小さい子ガラスたちがあちこちから集まって来て、牛の肉を食べようと騒いでいた。そこへ一番後から行った年寄りのカラスは「牛は角の方が特別においしいから、君らはそれを食べなさい」と言った。子ガラスたちが集まって大きな角をカチン、カチンとつついていた。その間に年寄りガラスは自分で肉を全部食べて飛んで行った。子ガラスたちは年寄りガラスにだまされてしまったので残りの骨を自分ら同志、同じくらいに分けて食べた。情のない年寄りガラスだね (多良間村、池間常公、1981)。

6) ミハギ鳩 (視力の弱い鳩) とカラスのゆがたい (宮古島の民話第4集、1984)

昔、ミハギ鳩 (写真4) とカラスの友だちがいた。ミハギ鳩が浜で大きな魚の死体を見つけた。「さて、どこから食べようか」と迷っていると、そこへ友だちのカラスが飛んできて「私にも食べさせてくれ」頼んだ。ミハギ鳩は「いやだ」と断った。カラスは「友だちではないか」と言うので仕方なく、カラスとミハギ鳩は誰から先に食べようかと相談した。カラスは「年寄りから先にたべよう」と言いだした。ミハギ鳩は「いいでしょう」と了解した。

カラスはその鳩に「お前は、いくつになった」と聞いた。鳩は「私は7歳になった」と言った。「それではお前はどうか」と鳩は聞いた。私は「20になるよ。私からたべるぞ」と言って魚の肉を全部食べてしまった。残った骨を食べながらミハギ鳩は「私が見つけた魚なのにお前の知恵に負けてしまった」と言って悔しがった。

4) の民話「カラスと弁当」ではカラスに毒味させて自分たちの命を守っている。それだけカラスの地位は人間側から見るとどうでもいいと思える程、低かったということである。

5)、6) の民話ではカラスはすべてにずる賢い鳥として登場している。昔から人間にとっても評判が良くないようである。ミハギ鳩とは視力の弱いキジバトのことである。

唐沢 (1986) によると、なすこと、することがすべてマナー違反のカラスは以下のような習性を持つという。

① 生ごみの多く出る所に集まる。漁港では業者が捨てた魚や内臓等も好んで食べる。

- ② 集団意識が強く、遊びができる（石ころ遊び、電線ぶら下がり遊び、木片落とし）
- ③ イギリスのウェールズ地方ではスキーをするカラスが観察されている
- ④ 食べ物を保存する
- ⑤ 隠し場所では腐れやすいものから順にたべていく
- ⑥ 煙浴をする（体に着いたダニ等をとる）
- ⑦ 言葉を覚える（おはよう、青山さん）
- ⑧ 地域ごとに言葉をもっている
- ⑨ 雑食性で何でも食べる（スズメ、サンコウチョウ、アカショウビン、キンバト、カラスバト等、野鳥のヒナや卵、子ネコ）
- ⑩ 経済状況が良いとカラスは増加する

宮古のカラス

宮古のカラスについてはまとまった報告書はない。唯一記録のあるのは高良鉄夫琉球大学名誉教授の「甘藷害虫防除対策保護鳥獣調査報告書、1970 ？」だけである。ここではその報告書を引用したい。

1934 年代、大野山林はカラスの巣窟だった。1945 年以降（終戦後）、大野山林のリュキュウマツ林が伐採され、芋畑に変わった。その時にエビガラスズメ（スズメガ科）やイネヨトウ（ヤガ科）等の幼虫が大発生し芋やサトウキビに大被害を与えた。その当時、大人も子供も総出でその幼虫を駆除した。しかし、その幼虫はカラスが好む食べ物でもあった。幼虫の激減でカラスの数も少なくなった。その後、1960 年頃には狩俣の御嶽林で約 80 羽が確認された。1975 年頃には宮古島で数羽が確認されたがそれ以降宮古島ではカラスが見られなくなった（高良鉄夫私信）。1977 年頃には伊良部で 25 羽のカラスが目撃された（高良鉄夫私信）。その後、繁殖環境の整った伊良部で個体数を増やしていったと考えられる。

1984 年、羽を切られたカラスが高野部落に出没した。子供たちはそれに「タケル」という名前を付けて可愛がった。その後、1987 年、城辺の砂川小学校付近でカラスが 1 羽目撃されたが「タケル」とは異なる個体であった。

結局、宮古島のカラスは 1980～2000 年の約 21 年間、伊良部島を除いて消滅したことになる。その要因は前述の大野山林のマツ林伐採による営巣木の減少、芋畑やキビ畑への頻繁な人の出入り、そして次々と上陸した台風もカラスの繁殖に影響を与えたのかもしれない。

また、その頃使用されていた DDT 等、毒性の強い殺虫剤やフラトール系の殺鼠剤等で弱ったり死んだりした小動物をカラスが食べて二次被害を受けた可能性もある。いずれにして

も、緑の大幅な伐採、芋畑・キビ畑への人々の出入り、農薬、台風（ヒナや卵の死）等の複合的な要因でカラスの繁殖が妨げられ次第に消滅していったと考えられる。

しかし、2001年頃から少しずつ数を増やしはじめた。特に伊良部大橋の完成後（2015年1月31日、3,540m）には急激に数を増やしている。現在（2019年）宮古島全体で約700羽（写真5）、伊良部島で約150羽、来間島で5羽、池間島で10羽。宮古諸島全体で約865羽がカウントされている。なお、多良間島では1972年頃を境に見られなくなった（久貝、1998）。しかし、近年（2018年頃）、1～2羽の目撃情報がある。



写真5 リュウキュウハシブトガラスの群れ
（写真：金子進、大野山林、2011, 12, 27）

カラスの影響

カラスは雑食性でネコや犬の交通事故死体、スズメのヒナ、キジバト、ニワトリの卵やヒナ、時には子猫も襲う、国指定天然記念物のキンバト、カラスバトの卵やヒナ、サンコウチョウ（夏鳥、方言名：ズウナガマシヤ）の卵やヒナ、漁港付近では漁師が捨てた魚や内臓も食する。

伊良部ではこれまで草原で繁殖していたセッカ（伊良部方言名：ガヤンチュ）やミフウズラ（伊良部方言名：ウッジャ）がカラスの攻撃を恐れて繁殖場所をキビ畑に移している。

イソヒヨドリやスズメは人家に巣をかけ人間と共存することでカラスからの被害を最小限に抑えている。つまり、カラスの捕食圧を人によって防ごうという戦略である。

歴史的に見ると、人は野鳥にとって最大の保護者であるとともに最大の敵（天敵）でもあった（唐沢孝一、1986、都心に生きるカラス、Green Letter 創刊号、p20-22）

唐沢によるとカラスは典型的な一夫一妻制で繁殖期には巣を中心にしたナワバリを持ちこのナワバリ内でエサを調達する。スズメやツバメなどの巣のありかなども全部知っていて、幼鳥が巣立つと同時に捕食する（唐沢、1986）。

今、あちこちで生ごみがカラスに食い荒らされる被害が出ている。那覇市内でもカラスがゴミ袋をつつくのが見られるようになってきているという（沖縄タイムス、2019、10、26）。人間側がしっかりとゴミの管理をしないとどうしようもない程、カラスは人間の想像をはるかに超える知的行動をする。カラスを撃退する名案はなかなか見つからないのが現状である。

カラスの知的行動

宮古ではほとんどの地域でガラサという方言名がつけられている。カラスは人間にとって悪役の存在だが、極めて知能の高い鳥である。細長い筒状の入れ物に少量の水を入れエサを浮かべる。最初、エサが食べられなくウロウロするがしばらくすると近くにある石ころを拾い集め、それを筒の中に入れ、エサを浮上させ難なく、そのエサを取るという。つまり、道具を利用して食べ物を得ることができるということである。

童謡に七つの子（作詞：野口雨情、作曲：本居長世）という歌がある。その一番目に「カラスなぜ啼くの カラスは山に 可愛い七つの子があるからよ」という歌詞ある。ここで七つの子とはどういうことだろうか。カラスは普通3～5 個しか卵は産まない。この件について江副（えぞえ）は鳥名源（2010）の中で「ななつとはか弱い、美しい、小さい子」と解説している。

7) 鳩が見つけた井戸（伊良部、佐和田、佐和田カニ、1976、7、26）

昔、佐和田には水がなかった。村人たちは畑の溝にたまった水を澄ませて飲んでいた。家では屋敷の隅に穴を掘って水を溜めた。干ばつになって村人たちは水を探していた。そこへ鳩が水に濡れて出てきて「ここにはきつと水がある。ここを掘りなさい」と教えた。村人たちがそこを掘ったら水が出てきた。ここの井戸水はどんな時にも枯れることはないと言う。

この民話は旧約聖書に出てくる「ノアの箱舟」を思い出させる。地上を覆う大洪水から箱舟で逃れたノアは洪水の様子を確認するためにカラス（ワタリガラス）を空に放した。しかし、自由気ままなカラスはいつまでたっても戻ってこない。今度はハト（カワラバトだと思

われる)を放った。しばらくするとハトはオリーブの小枝をくわえて戻ってきた。ノアはこれで大洪水の水が引き始めたのを知った(細川博昭、2018、人と鳥の文化誌)。

人間の生活に欠かせない命の水を最も身近にいる鳩(キジバト)が見つけてくれた。鳥と人間との緊密なつながりに感動させられる。キジバトの方言名はンバト(平良、城辺)、パトゥガミ(多良間)である。農村地域では子供たちの貴重なタンパク源にもなった(城辺町史、第五卷民話集、1990、p372-373)。

宮古諸島におけるスズメの民話

スズメは私達に最も身近な鳥で宮古でもスズメにまつわる民話は少なくない。中でも昔から祝い事や神事に欠かせない酒がスズメと関わっている8)の「泡盛のはじまり」という民話は大変に興味深い。あらすじは以下のようになっている。

8) スズメと泡盛の始まり(伊良部、佐和田、佐和田カニ、1989、いらぶの民話)

「昔、米、粟のよく取れる田の片隅に高い木があった。その木にはたくさんのスズメが米や粟の穂をくわえてつついて食べていた。つつきながらこぼした米粒が木の洞にたまって雨が降るたびにふやけて麴が生え、だんだんモロミに変わった。それをスズメがなめたり、つついたりしているのを見た人がこれは飲めそうだと考え粟を突らせ麴を作り酒を造った。いい酒だったのでそれに泡盛と名付けた。酒はこのようにして始まったそうだ」(1989、いらぶの民話)。

スズメと酒に関係する民話は旧上野村の民話(1981)の中でも「酒のはじまり」、多良間村の民話(1981)の中でも「雀酒屋(すずめさかや)」として紹介されている。

また、全国的に知られている「舌切り雀」の話は宮古でも以下のように伝わっている。

「昔、おじいさんとおばあさんが暮らしていました。2人には子供がいません。ある朝、早くおじいさんが畑を見回りに行くとスズメが1羽遊んでいました。子供の代わりにかわいがってあげようと家に連れて帰りました。ある日、スズメはおばあさんが作ったノリを全部食べてしまいました。怒ったおばあさんはスズメの舌を切ってしまいました。それを知ったおじいさんはやぶの中へ逃げ込んだ「舌切り雀」をさがし心からお詫びした。その日、おじいさんはスズメの家に招かれ歓待をうけた。帰りに小さなつづらと大きなつづらを用意されたがおじいさんは小さなつづらを選んだ。持ち帰った小さなつづらを開けてみると中には大判、小判が入っていました。それを聞いたおばあさんは同じようにスズメの家に行った。欲

がでたおばあさんは大きいつづらをもらい帰る途中に箱を開けた。中にはハブがぎっしり入っていておばあさんにかみついた。おばあさんはあまりの痛さに泣きながら家に帰った。その話を聞いたおじいさんは「心がけが悪いとそうなるのだ」とおばあさんを諭した。それから、おばあさんは心を入れかえ良いおばあさんになった」（佐渡山安公、1978）。

9) 雀酒屋（すずめざかや）（多良間村、饒平名泰仁、1981）

ある人が麴を造るための材料の麦を煮て庭に干し広げた。雀が来て主のいない間に食べ主が来たらまた石垣に止まったりしていた。

それから一週間から十日ほどのうちに、その人が見ていると雀は飛んできて、自分が麦を蓄えた所に入ったりしていた。その内に雨が降り麦を入れてあった石穴の中の麦は麴になりそれに水が溜まった。それを飲んで愉快になって遊んだり踊ったりしている。「これはおかしい、この雀は何が愉快なのだろう」と、その人が見ていると、自分が干していた時の麴麦をついばんで行って貯えた麦が、麴になり、その中に水が溜まり、それを飲んだ雀が愉快に遊んでいる。その人がなめてみると、体中がポカ、ポカして気持ちよくなった。「これはあんな雀が造ったものだけど人間の体全体にしみ込んで気持ちよくさせる。人間にとっても妙薬だろう」と雀から教わって研究した。

しかし、あの酒を研究した人は、悪いものを発明したとって殺された。その後から「ああ、あんな良い物を発明した人を殺してしまった」と、その時の役人たちは悔やんだ。



写真6 スズメの集団ねぐら
(平良松原、2015, 8)



写真7 畑周辺のイネ科植物の種子
を食するスズメ (2015, 9)

ガジュマルに 雀咲かせ 秋茜
(伊志嶺あきら 麻姑山俳句会)

宮古諸島におけるスズメの方言名

多良間村（仲筋、塩川）：ヤーッフアDOI、伊良部（佐良浜）：フッフアドリヤ、伊良部（長浜、佐和田）：フッフアドリヤ、パドリヤ、マチャ、伊良部（伊良部、仲地）：フサドリヤ、池間島：フッフアドリヤ、市内添道：パドゥイ、マシヤ、市内東仲宗根：パドゥイ、マシヤ、市内荷川取：パドゥイ、市内下里：マシヤ、城辺：パドゥラ、上野：パドゥラ、久松：マシヤガマ、パドゥイ、下地与那覇：マチャガマ、下地上地：パドゥラ、来間島：スピズマサ、パドゥイ（久貝、2017、宮古島市総合博物館紀要、p1-17）

1 0）13羽の白鳥（シラサギ類）（宮古島上野、佐渡山マツ、宮古の民話第4集、1984）

昔、あるところに女の子が生まれた。女の子が生まれたとき、この家には肌着が12枚もあった。女の子が大人になって「どうして家には12枚もの肌着があるの」と母さんに尋ねた。母さんは「私達には男の子が12人いました。ところがあなたが生まれるときに、今度生まれる子が女だったら男の子たち全員、海に流してしまおうと父さんが言っていたのであなたが生まれると赤旗をあげて男の子全員を山に逃がしてやった。今は山で生活しているだろう」と打ち明けた。「そんなら、私も兄たちのところに行きたい」と母親の止めるのも聞かず山に出かけて行った。

12人の兄弟は白鳥になっていた。女の子も兄たちと同じように白鳥になり13羽で空を舞った。白鳥は13羽の兄妹だったということです（宮古民話の会、宮古の民話第4集、1984、p38）

ここでも白鳥はシラサギ類だと考えられる。

1 1）ウズラのゆがたい（与那原ママド、宮古の民話第4集、1984）

むかし、父ウズラ（写真8）と母ウズラ（写真9）が野原に住んでいた。ある日、母ウズラが卵を温めている時に野原が火事になった。父ウズラは、いそいで逃げ出した。しかし母ウズラは卵（写真10）を抱いているので逃げられない。

母ウズラは大和鎌で自分の巣の周りを全部刈り取り巣は火事から守られた。そして無事4つの卵からヒナ鳥が生まれた。母ウズラと4羽のヒナが無事であることを確認した父ウズラは母ウズラと4羽のヒナに詫びを入れ一緒に暮らすことになった。

4羽のヒナにはそれぞれ「のど黒」「あや目」「白目」「黒目」という名前をつけ家族は仲良

く暮らしした（宮古民話の会、1984、宮古の民話第4集、p122）

どういう時でも子供たちを見捨てない母親の愛情がにじみ出ている民話である。宮古では命がけで子育てをするミフウズラの話は有名である。ミフウズラは人間も見習わなければならない子育ての鏡である。しかし、実際には子育てにかかわるのはオスの方である。メスはただ卵を産むだけで抱卵、子育てはすべてオスが行う「かかあ天下」の世界なのである。

ここでいうウズラとはミフウズラのことである。宮古での方言名は以下の通りである。ウジャ（平良全域）、ウッジャ（多良間島）



写真8 ミフウズラ（オス）（ミフウズラ科）

写真9 ミフウズラ（メス）（1988,6）

（写真：山本晃）



写真10 ミフウズラの卵（1981,3,31）

1 2) ウズラと野火（嘉味田マシラ、多良間村の民話、1981）

昔、ウズラの生活している山が火事になった。ウズラ同志「さあ、野原が焼けているので私たちみんな飛んでいこう」と言うと、外には卵を産んでいるもの、子どもを抱いているものもいる。母ウズラたちは「野が焼けても卵と一緒に、また、自分の羽が焼けても自分の子どもと一緒に」と言って断った。その内に野火は無事通り過ぎた。そのお祝いに皆、浜に下りて浜千鳥（シギ・チドリの仲間）たちと一緒に踊って遊んだ。その時に歌われた歌が以下の「ウズラと野火のうた」であるという。ミフウズラはサシバと同じように、最も身近な鳥として島民の生活の中に入り込んでいたということである。

ウッジャが母（んま）よ、トゥヌカかが親（んま）よ

野火ぬ出でいるば 焼火やきびいぬ出でりば
じゅー私達飛（べーた）飛ばがら、じゅー私達（べーた）舞上（まや）がら
君飛（うわとう）ばがらだ、君舞上（うわまや）がらだ
片羽（かたばに）が焼きとうん、二羽（ふたばに）が燃（む）いとうん
私子供（ばがふっふぁ）一緒（とうとうみ）、私卵（くが）一緒
一緒ぬかぎしゃ、うがかぎしゃ一緒
海千鳥（いんつどうれ）がまよ、浜千鳥（ばまつどうれ）がまよ
白浜（すすうばま）ぬ真中（まんなか）ん、かぎ浜ぬ真中ん
踊（ぶどう）りがましーすさい、躍（とうぬぎい）がましーさい
踊（ぶどう）りがまぬかーぎしゃ、躍（とうぬぎい）がまぬかーぎしゃ
うれー見（みー）や、しゅん、しゅーん
かー見や、しゅん、しゅーん（多良間の民話、1981）

意 訳

ウズラの母よ、卵の親よ
野火が出たので、野原が燃えだしたので
さあ、早く逃げましょう
さあ、早く逃げましょう
君、先に逃げなさい、君、急いで逃げなさい
私は、片羽（かたは）が焼けても、二羽（ふたは）が燃え落ちてても
私の子供と一緒によ、私の卵と一緒によ
親子一緒にの美しさよ、その美しさといったら
海辺の千鳥よ、浜辺の千鳥よ
白浜の上に、美しい浜の中に
踊りをして遊ぼう、跳ねて遊ぼう
何と踊りの美しさよ、跳ね方のみごとさよ
あれを見そめて、手を取って
これを見そめて、なじんで抱き合って（多良間の民話、1981）

1 3) ユーサ（サギ類方言名）のゆがたい（池間島、新城メガ、宮古の民話第4集、1984）

海岸の岩の上にユーサ（サギ類）が子どもを二匹生んだ。母親は朝食のエサを捕りに行った。漁をして歩き回っているうちに青い溝があったので、ヒャークラサー、ヒャークラサーと言って超えた。その時に、うっかりシャコガイに足をくわえられてしまった。「いたい、いたいよ」と叫びながら助けてくれとシャコガイに頼んだ。しかし、「お前の足はおいしそうだから食ってしまおう」と言う。ユーサは「そんなら、白い布や美しい布をあげるから助けてくれ」と言った。シャコガイは「白い布や美しい布はもらおうとは思わん。お前の足の美味しさにはかなわない」と言う。ユーサは「そんなら東のミガガマという美しい女を差し上げましょう」と言うと、シャコガイは「それはいい」と言って離してやった。

ユーサは足を持ち上げると「この野郎、お前にはこうしてやる」といって下痢のフンをシャコガイの口にピーッと出した。それでシャコガイの口は青いという。

鳥の行動を通して俗っぽい人間社会の一端を垣間見ることの出来る民話である。

1 4) 青鳩になった子供（前里財義、城辺町史、第5巻民話集、1990）

昔、粟が豊作に実った年があった。母親は四つになる子供を連れて畑に行った。母親が粟の収穫に精を出していると、子供が水を飲みたいと言い出した。母親は粟刈りに忙しかかったので「これだけ刈り取るまで、待ってね」と言った。しかし子供は「水が飲みたいよー」とひっくり返って泣きわめきました。母親は気にしながらも「待ちなさい。あと少しだからね」と言うだけでした。そうしているうちに、子供は青鳩になって水を飲みに飛んで行ってしまいました。それを見た母親は、座り込んで「あー私の子供よ」と叫びましたが、どうすることもできません。青鳩（写真 11）が鳴くのは、あの子供が泣いて青鳩になったからだという。

度の過ぎた生理的欲求の我慢を子どもに無理強いするのは、慎みなさいという一つの子育て教訓かもしれない。確かにこの青鳩（ズアカアオバト）は「ヒューツ、ヒューツ」と笛や尺



写真 11 ズアカアオバト
（ハト科）（2019, 10）

八の音色で鳴く。聞き方によっては「水が飲みたいよ〜」と聞こえるのかもしれない。

なお、宮古で繁殖しているハトの仲間はキジバト（方言名：ムバト、多良間島：パトゥガミ）、ズアカアオバト（方言名：オオバト、多良間島：アウバトゥ）、キンバト（国定天然記念物）、カラスバトは牛のようにウーウーと鳴くのでウスバトとも呼ばれる（方言名：ウスバト、多良間島：ガラシャバトゥ、国定天然記念物）である。

1 5) 魚女房 (平良カナ、上野村新里、沖縄の昔話、1980)

母ちゃんのいない男がいた。ある日、海に行ったらきれいな魚が捕れた。それを海水の入った瓶の中に入れて養った。その日から男が畑仕事から帰るといつも、おいしいご馳走が準備されていた。不思議に思った男が畑に行くふりをして様子を見てみると、魚が瓶から出てきて、きれいな女になり、ご馳走を作っている。男は感激して夫婦になった。その内に子供も出来、男は金持ちになった。しかし、男は気持ちが変わって「海へ帰れ」と怒った。「帰ってもいいのか、お父さん」と言ったら「ん、帰れ」と言った。その母ちゃんは子供をおんぶして海に帰った。男が家に帰って来たら、何にも残っていない。食べ物もなく、貧乏になった。それから男はコウイ鳥 (オオクイナ) (写真 12) になって「コウイ母ちゃん、コウイ母ちゃん」鳴くようになった。



写真 12 オオクイナ (クイナ科)
(1984, 7、大野山林)



写真 13 オオクイナのひな (2017, 6)

オオクイナ (クイナ科) は南方系の鳥で宮古島が繁殖分布の北限 (写真 13) である。宮古島での方言名はコーイドウイ、多良間島ではヤマミタナである。繁殖期は梅雨の頃でその時は夜 8 時前後になると決まった調子、決まった声で「クワーツ、クワーツ」とほぼ一晩中鳴き続ける。聞き方によっては「コーイ、コーイ」と誰かが人を呼んでいるようにも聞こえる。1980 年代には梅雨入りすると、ほぼ毎年のように「近くの木の上で鳥がコーイ、コーイと自分を呼んでいる」という電話がよく入った。特にお年寄りや病人のいる家族からの電話が多かった。その度に私はその電話の家を訪ねこの鳥はオオクイナと言い、「コーイ、コーイ」という鳴き声はオスがメスに必死になって自分自身をアピールしている「ラブコール」だという話をして納得してもらった。

1 6) やもりと鶏 (多良間村の民話、1981、奥浜真鶴、)

昔、ある国で王様の家来が王様に対してすまない事をしたらしく、王様に殺された。王様が彼らに言うには「一人の者はヤモリになれ、また一人は鶏になれ」と言われた。ヤモリになる者は、昔は家の壁はすすきの壁であったから「そのすすきの壁に隠れていて時を知らせなさい」と。また、一人の者には「君は鶏になって、あのヤモリが時を知らせた時に木の上の上がってみんなに時を知らせなさい」と言った。その時からあの鶏は木の上で時を告げるようになった。

ヤモリは家の中にいて夜中に大声で鳴くので、昼、鳴き声はほとんど聞こえない。しかし、夜中になると鳴く。午前になると「もう朝だよ」との知らせをしなさいということだから鳴くという。

かつて、宮古では一番鳥は午前二時頃に鳴いた。二番鳥は早朝六時頃に鳴いた。村では朝六時頃にはその家の娘さんたちが一日の食料である芋を炊いた。二番鳥が鳴いて芋を炊く時間になると恋人たちや村の青年たちが薪を取ってきたり水汲みをしたりして芋炊きを手伝ったという。その時間帯は恋人たちにとって楽しい語らいの時間だったようだ（私信、普天間裕）。

17) セッカと生（い）き水（みず）（多良間村の民話、1981、宮国岩松）

セッカ（多良間方言名：ゲーントゥ）がスツウプナカ（多良間村の村行事としての豊年祭。毎年、旧暦4月の吉日に行う）の翌日、生き水（豊年祭の翌日、チカラシバ、方言名：シュガイシバの上で浴びる水。これを浴びると健康に恵まれる）を瓶に入れて運んでいく途中、桑の実がたくさん熟れているので、それを夢中になって食べた後、その生き水の所へ戻ると、全部、ヘビやトカゲが浴びってしまったて空になっていた。それでもう、どうしようかと悩んだ結果、主人の所へ行って「行く途中で桑の実を食べている間にヘビやトカゲがやって来て生き水を浴びてからにしてしまった」と言う。「君は何と何をしでかしたのか」と。「もう、仕方がないので、残っている水を人間の爪につけて」と言った。セッカはその罰として縄で縛られた。それ以来、セッカの足はあのように細くなった。

私たちの爪は、あの時、生き水につけたので何回も生え変わる。また、ヘビやトカゲは脱皮できるようになった。

18) 雲雀（ひばり）と虹と生き水（池間島、与那嶺カナス、宮古の民話、第4集、p113）

その昔、人間は脱皮していた。雲雀は巢出水（すでいみず）を持って天から降りてきた。

その時、天に出る虹が、それを奪って捨ててしまった。太陽とお月さんは、虹を叱った。それで、太陽が、あちらに出ると、あの虹は反対の向こうに現れ、太陽が向こうに出ると、反対にあちらに現れるという。

巢出水を捨てた雲雀は、大きな鳥だったが、神様である太陽がだいぶ、油をしぼりあげたので小さな鳥になったという。

19) 雲雀と生き水 (池間島、前泊メガ、宮古の民話第4集、p133)

昔、雲雀は鳥の中でも一番大きかった。ある日、天の神様が雲雀に「巢出水を持って天に昇って来なさい」と雲雀と蛇に命令した。雲雀と蛇は一緒に昇って行った。その途中、ヘビが雲雀の足に巻き付いた。びっくりした雲雀は持っていた巢出水をその蛇に浴びせてしまった。天の神様の所に行くと、雲雀は「蛇が私の足に巻き付いたので私は水を捨ててしまった」言った。

それを聞いた神様は「お前は蛇の悪知恵に負けた。蛇はその巢出水で巢出るようになる。お前はこれから絞り上げる」。体の一番大きかった雲雀は絞り上げられ小さくなった。雲雀とはガヤンチュのことだが、雲雀は一番知恵のある鳥だ。ススキの中に周囲を巻いて巢を作る。巢の入り口は、東風が吹くと北の方につくる。入り口は風に向かわないように作る。南風が吹くと必ず北側に入り口を作る。北風が吹くと南に向いて入り口を作ると言う。ほんとに鳥の中でも知恵のある鳥である。

ここに出てくる雲雀(ヒバリ)とはセッカ(写真14)のことである。雲雀は数少ない冬鳥で宮古ではその姿を見るのが難しい。この巢出水、生き水の話は宮古では広く知れ渡っている。漲水御嶽大蛇伝説の中に出てくる蛇は写真のサキシマスジオ(写真15)ではないかと言われている。



写真14
セッカ (ヒタキ科)
(1989, 8)



写真15 サキシマスジオ (ナミヘビ科)
(方言名: オウナズバウ)
(写真: 梶原健次、2017, 8, 8 下崎)

20) ツバメとカンタマシャ (多良間島、下地モツ、宮古島の民話第5集、p139)

ツバメ (写真 16) とカンタマシャ (和名 : セキレイの仲間) (写真 17) はツバメが姉でカンタマシャは妹だった。ところが母親が今日か、明日か死んでしまうかも知れない重い病気になった。ツバメは姉だったが、そのこととは関係なく、顔を洗い化粧し、髪をとき、毎日、男たちと遊び回っていた。しかし、カンタマシャは「お母さんとどこまでも一緒だと」と髪をとく暇もないほど看病し、「どうしたら助かるのか」と心配して、この姉に「お母さんは二度と見えないかもしれない知れぬ、どうして、あんたは自分のことばかりに夢中なのか。誰でも一度きりの命なのに、二度とある命ではないのに、そんなにしているのか、それはだめだよ」と言うと、「死のうとしているなら、誰も死ぬから、死なせたらいいさ」と姉は言った。「ああ、そうか、あんたはそんなにしか思わないのか、そんならここに居るな」と怒った。「ああ、いいよ」と、とてもきれいに着飾って、この姉は出て行った。

この様子を天の神様が見ている、親不孝な姉のツバメは良い天気には出さず、北風の吹く寒い雨の降る悪い天気に出すようにした。それで、あのツバメは良い天気には出さず、悪い風の吹く北風が八日も続くような悪い天気に出るといふ。

カンタマシャは母親が死んで四十九日になっても髪をとかず、食事も食べようとしない。髪をとこうとすると、かたくなって、とくこともできなかった。それをハサミで切ったが髪は少しだけ残った。カンタマシャは母親のことばかり想い、毎日墓に行って泣いてばかりいた。隣近所の人々は「かわいそうだ」と食べ物をあげると、「墓に持って行って母さんと一緒



写真 16

ツバメ (ツバメ科) のヒナ育て
(1980、来間島)



写真 17

ハクセキレイ (セキレイ科)
(1989, 1)

に食べよう」と言って持って行った。

あのツバメは世の中で一番の親不孝者だ。それで、天気の良い時には出ず、カンタマシヤは髪はボサボサしているが、天気の良い時だけに現れるという。

ツバメとセキレイが出てくるのはこの多良間の民話のみである。「セキレイは日本神話で最初に登場する生き物である。セキレイが尾を上下に動かす姿を見てイザナギとイザナミは生殖の方法を知る。そして、無事に国土を生み出すことができた。鳥によって、啓示がもたらされたのである。セキレイがいなければ日本と言う国も、そこで暮らすすべての生き物も誕生しなかった。それゆえに、セキレイこそが日本神話の最初の要だったという事もできる」(細川、2018)。

(2) 食の中の鳥

宮古ではどんな野鳥が食の対象になっていたのだろうか。ここでは、サシバ、キジバト、シロハラ、スズメ、ミフウズラを取り上げる。

1) サシバ (方言名：タカ、ターカ)

1960年代、サシバはサシバのシーズン中(寒露の頃)、は島中が燃えた。大人も子供も血が騒いだ。皆、こぞってサシバ捕獲に繰り出した。サシバ捕獲は島人達の年に一度の楽しいハンティングだった。捕獲されたサシバは食料や子供たちのペットになった。市場にも売りに出され貴重な換金動物でもあった(久貝、2019)。

捕獲は宮古の古老たちが長い年月かけてサシバの習性を熟知して考案した宮古独特のツギヤ(捕獲小屋)で捕獲した。詳しくは「宮古のサシバ文化」の項を参照されたい。主に雑炊にして食べた。その当時は貴重なタンパク源であった。

2) キジバト (方言名：ムバト)

子供たちは木の枝に止まっているところをパチンコで射った。時には馬の尻尾でワッカをつくり竹竿の先にくくりつけて抱卵中のキジバトの首に引っ掛けて捕った。焼いて食べた。

3) シロハラ (方言名：フシュイ)

伊良部島ではワナ(方言名：ストム)を仕掛けて捕った。ワナは与論のワナ(方言名：スーヤマ)とほとんど同じ。違いは形が四角形である点だけである。焼いて食べた。



写真 18

シロハラ (ヒタキ科)
(写真：山本晃、1989, 12)



写真 19

シロハラ捕獲器 (与論島、与論民俗村)
与論方言でスーヤマ (シロハラ捕獲罟)
(2018, 4, 28)

4) スズメ (方言名：パドィ、フッフアドリヤ)

子供たちは、かやぶきの軒下で寝ているのを捕獲したり、古井戸を集団ねぐらにしているスズメをその古井戸の入り口でカジユマルの枝を振り回し、驚いて飛びあがって出てくるスズメを捕獲して焼いて食べた。時々ワナも仕掛けた (竹籠を紐の着いた短い木切れで支えその竹籠の下にスズメが好む米粒を置いた。スズメが竹籠の下に入ると紐を引っ張り捕獲した) (写真 20)。

多良間島では喘息に効くということで食用にもされた。東仲宗根では神の使いとも言われている。伊良部佐良浜ではスズメを方言で「フッフアドリヤ」という。スズメはピーチクパーチク騒がしいのでおしゃべりな人を「フッフアドリヤ」と呼ぶ (私信：前泊龍英)。



写真 20

スズメ捕獲罟
(イメージ写真、2019, 11, 25)



写真 21

パニヤマ (多良間島)
多良間村ふるさと民俗学習館
(写真：松本尚、2019, 12, 23)

5) ミフウズラ (方言名：ウジャ、ウッチャ)

巣を見つけると子供たちは巣の周囲を複数でぐるぐる回り、恐怖ですくませ、卵を抱いているミフウズラを巣の上から両手で抑えて捕獲した。焼いて食べた。多良間ではパニヤマと呼ばれるワナでミフズラやシロハラを捕獲した (写真 21)。

宮古ではサシバ以外に大量捕獲されタンパク源や換金動物になった鳥類はいない。

(3) ペットとしての鳥

人々はペットとして以下の野鳥等を飼い鳴き声、物まね、カラフルな色彩等を楽しんだ。

1) メジロ (方言名：ソーミナー、ムーヌイマシャ、クガニミーマシャ)

メジロは江戸時代から、その美しい鳴き声を競う「鳴き合わせ会」を通して人々の生活の中に入り込んでいたという。かつて、宮古でもその美しい美声に取りつかれメジロを飼う人が多くいた。しかし、メジロも自然生態系を維持する上で欠かせない大切な構成種である。人間がむやみに自然界に入り捕獲することは禁止されている (鳥獣保護法)。

以下の場合には例外で捕獲が認められている。

「学術研究や鳥による生活環境に関わる被害防止などのために環境大臣または都道府県知事が許可を与えれば捕獲は認められます」。

愛玩目的の捕獲については環境省が告示した基本方針「鳥獣の保護及び管理を図るための事業を実施するための基本的な指針、平成 26 年 12 月最終改訂」により密猟を助長するおそれがあるため禁止するとの方向が打ち出されました。それゆえ、現状では捕獲は許されない (弁護士ドットコムニュース、2015、3、26)。

2) インコ類

人目を惹くカラフルな色彩で人々の生活に潤いを与えた。

3) オウム類

色彩は地味だが言葉や芸を覚えるなどして人々を楽しませた。

4) 十姉妹 (ジュウシマツ)

十姉妹 (ジュウシマツ) は江戸時代から日本人に愛されている鳥である。宮古でも一時期多くの家庭で飼われていた。籠脱けや家で飼いきれなくて近くの野山に放し野生化している

個体もいる。ペットを飼う時は最後まで責任をもって欲しいものである。十姉妹（ジュウシマツ）は東南アジアに生息している「コシジキンパラ」を日本で品種改良して誕生した鳥で穀食に進化したスズメ科やアトリ科の鳥を指す「フィンチ」に分類されている（ネット、十姉妹をペットに？ 性格や特徴は？ 寿命や鳴き声は？ Pepy）

5) 伝書鳩

カワラバト（ドバト）などの鳩を飼いならし、鳩の帰巢本能を利用して遠隔地から鳩にメッセージを持たせ通信手段の一つとして利用した。

宮古島では1965年に関東から帰省した人が鳩飼育を広め1990年頃から飼育者が増加した（南来琉なんくる、2006、8月号、レース鳩誌）

（4）家禽としての鳥

家禽とは鶏に代表されるように主に肉や卵を取る目的に家で飼う鳥の総称である。ここでは特に家禽の闘鶏について紹介する。闘鶏については宮古史伝（1976）に以下のような記述がある。

「傳説に曰く、尻間の里に尻間美雅蛾麻（すしまみががま）という月をもあざむく程の美女があったが常に深閨に花として育てられ誰一人も之を見たものがなかった。その弟に一人の男児があって或日、友人と共に闘鶏の遊びをしようと鶏持って方々歩いた。……」（1976、慶世村恒任、宮古史伝、復刻版、pp157—158）。

この宮古史伝にも記されているように15～16世紀頃には宮古でも子供たちはトイアース（闘鶏）で遊んでいたようだ。その名残だろうか、1960年代にはあちこちの部落（城辺、鏡原、伊良部島）で子供たちはそれぞれ自分の家で飼っている鶏（雄）を持ち歩き友人の鶏（雄）と喧嘩させて楽しんだ（私信：本永清、普天間裕）。もともと宮古にはオリジナルの地鶏はいない。彼らが遊んだのはスマドイ（雑種）である（私信：砂川栄喜）。

宮古で金を賭けた大人の娯楽、闘鶏はタイあたりから移入された軍鶏（シャモ）を使ったようだ。シャモは高価で庶民の手にはなかなか手に入らない。裕福層の人たちのみが所有できた。エサも健康で闘鶏に勝つように豆腐等を食べさせて大切に育てたというエピソードもある（私信：砂川栄喜）。闘鶏場は旧平良市時代の平和館（一世を風靡した映画館）裏通り、通称七福通りにあったという。

闘鶏は金を賭けてオスの鶏を闘わせる競技である。闘鶏で負け、傷ついた鶏は山や畑で捨てられたりしていた。しかし、今、その野蛮な闘鶏を止めさせようという動きが高まり「闘鶏（シャモ）を禁止する条例の設立」を求める陳情が平成31年2月5日に沖縄県議会に提出

し受理されている。

沖縄では闘鶏のことを方言でタウチー、宮古では「トイアース」と呼ぶ。

古代から世界各地に見られた。イギリス文明の遺跡からも闘鶏をモチーフにした出土品が見られ、ニワトリを家禽としていた初期の時代から闘鶏は行われていたようだ

中国でも周の時代（紀元前 10 世紀）には既に闘鶏は行われていた。東南アジアでも古くから行われてきた。

宮中の闘鶏は 9 世紀から 10 世紀には闘鶏を好む天皇や公家によって正月後にしばしば催された。江戸時代にはタイ国から軍鶏が輸入されさらに盛んになった（Wikipedia）。

軍鶏（シャモ）とは鶏の一品種で闘鶏用、観賞用、食肉用に分けられている。

（5）ことわざ・言い伝えの中の鳥

ここでは宮古の日常生活の中でよく出てくる鳥に関する、言い伝えやことわざ等を集めた。この項ではそのほとんどを「鳥のことわざうそ、ほんと」（国松俊英、谷口高司、1991）から引用した。

① 雀（すずめ）百まで踊り忘れず

スズメは死ぬまで飛びはねたり踊ったりする。人間も若い時に身につけた習慣は年をとってもなおらない。

宮古のスズメは人間に一番近い野鳥。人がこぼしたり、落としたりした食べ物をエサにしている。

② 鳥合（うごう）の衆（しゅう）

規律も統制もなく集まってきた人々の集団。

③ 鳥（からす）の行水

風呂が短く、体をきれいに洗わずにすぐ出てしまうこと。

鳥にとって羽毛は一番大切なものである。汚れや老廃物、寄生虫を取り除いて、常に清潔にしておかなければいけない。鳥たちにとって水浴びは重要である。ハトは雨の日に雨浴びをする。ツバメは水面をすれすれに飛びながら体を水面に触れて水浴びをする。カワセミは水の中に飛び込んで水浴びをする。ミフウズラはよく乾燥した日当たりの良い所で足で砂を跳ね上げて砂浴びをする。スズメは水浴びと砂浴びをする（国松他、1991）。

④ 烏が泣くと人が死ぬ

昔からカラスほど人に忌み嫌われている鳥はいない。色、鳴き声、姿形が人から好まれないのだろう。昔話に登場するカラスもすべて悪者である。

カラスが群れをなして鳴くと、近くで死人が出る。カラスが屋根の上に止まって鳴いても人が死ぬ、ということで気味悪がられた。確かにカラスは病人特有の匂いに敏感なところがあるのかもしれない。しかし、「カラスが鳴くと人が死ぬ」は全国各地に残る俗信のようだ。

⑤ ガラサまい どうがたきど いざい (宮国、2017)

カラスの鳴き声はうるさい。うるさい人間は皆からきらわれる。

⑥ ガラサんぎ んまり

平良地区荷川取では、ずる賢い人をこのように呼ぶという。この言葉はカラスのずる賢いところからきているようだ (私信：砂川恵吉)。

⑦ ぴとくいガラサ

同じことを何度も繰り返して言う人

⑧ タカぬ もうちかあ ガラサ まいどう もう

寒露の頃に宮古の空にサシバが舞う。その時期、サシバの群れに混ざってカラスが真似て飛翔する時がある。能力のない者が能力のある人の真似をする。

⑨ ガラサまい ふあんど う ふい

カラスでも親鳥は自分は食べなくても子どもにはくれる。子を思う親の愛情を表現した格言である (佐渡山、1998)。

⑩ ツバメが巣をかけると繁盛する

家の軒下などで巣を作り人間のすぐそばで生活してきたツバメは昔から人々に親しまれ愛されてきた。ツバメは家の周りや田畑の上を飛びながら虫を捕えて食べる。農作物の害虫を多く捕らえて食べるので農家の人たちには特に大事にされてきた。また、幸運の鳥として、家に巣をかけると喜ばれた。宮古では来間島で繁殖記録はある (1980, 6) が現在は旅鳥である。宮古の各地で繁殖しているのはリュキュウツバメである。

ツバメにちなんだ言葉も多い。燕返しは佐々木小次郎がツバメの飛翔中の見事な急旋回に

感動して名付けられたという。ツバメを国鳥にしている国としてエストニア、オーストラリアがある。日本でも市町村の鳥にツバメを採用しているところもある（徳島県阿南市）。燕尾服（えんぴふく）男性の礼服の一つ。上着の裾がツバメの尾に似ている。ツバメは運行列車やJRバスの愛称としても知られる。また、日本救急救命士協会のシンボルマークでもある。若い燕とは年上の女に養われている、又は付き合っている若い男のことである（国松他、1991）。
多良間島には次のようなツバメのわらべ歌がある。

ようかにす（ツバメよ） あだんぶら（アダンよ） やーぬかんと（家の神と）
ぱるぬかんと（野良の神が） つけーすめー（飛び回っているよ）（豊島トヨ他、2015）

⑪ 鶴は千年、亀は万年

寿命が長く目出たいことをいう。鳥の寿命は何年くらいだろうか。内田清之助（鳥、1971）によると、コウノトリ 17年、カラス 14年、ハト 10年、スズメ 8年、ツバメ 7年という。ツルはその本にはないが、中国では 60 年生きたという記録があるようだ（国松他、1991）。

⑫ ツルのひと声

有力者や権威のある者がひと言で多くの人を従わせる。ツルの鳴き声はよく響くことからきているようだ。宮古ではツルはめったに見られない珍鳥である。

⑬ アカショウビン（方言名：クカイ、アカクガリイ）が家の中に入ると凶

東北あたりではアカショウビンは親不孝と結び付けられている。そこでは以下のような民話があるという。

—— 昔、ある所に母と息子の二人が暮らしていた。息子は少しも親のいうことを聞かず母親は心配のあまり病気になってしまった。母親は床の中でのどが渴いたので、息子に水を一杯くれと頼んだ。けれど、息子は水を汲んでやるどころか、囲炉裏で燃えていた薪を一本ぬいて母親にさしだした。母親は悲しんで急に死んでしまった。息子は驚いて、真っ赤な鳥になった。赤い鳥なった息子はのどが渴き水を飲みに行くと、自分の赤い姿が水面に映る。それは真っ赤な火となり、どうしても飲むことができない。それで雨が降るのをまって雨水を少しずつ飲んで命をつないだ。だから、この鳥はいつも雨を恋しがっている。アカショウビンは水恋鳥とか雨乞いとりと呼ばれ、雨降りの兆しとされた。だから、アカショウビンが来ると雨が降ると言われるようになった（青森、山形、新潟）——（国松他、1991）。

宮古では色が赤い故に特に家に中に入ると不吉（火事を連想させる）だということまで

も忌み嫌われている。アカショウビンは夏鳥（春に南の島から渡って来て、宮古で繁殖する鳥）で主に小型の両生爬虫類、昆虫類を好んで食べる。時々、ヤモリ等を狙って家の中に入り込むことがある。キョロロロローと鳴く。この声が聞こえる頃になると宮古の野山は一斉に夏の装いになる。



写真 22

アカショウビン（カワセミ科）
（1997, 5, 17、伊良部島）



写真 23

オシドリのオスとメス（カモ科）
（写真：山本晃、1989, 1）
オシドリの 等間隔で 進みをり
（伊禮貴子、麻姑山俳句集、1998）

⑭ オシドリ夫婦

オシドリはいつも一緒にいて中の良い鳥だとされる。このことから、仲睦まじい夫婦のことをオシドリ夫婦と呼ぶようになった。中国でも、かつて、この鳥は仲睦まじい鳥とされ結婚式のお祝いにはオシドリのつがいを贈ったという。また、仲の悪い夫婦には、この鳥の肉を食べさせると愛情が復活するとも言われた（国松、1991）。

しかし、ことわざと違ってオシドリは毎年カップルになる相手を変えているようだ。オシドリなどカモの種類は越冬地で結婚相手を見つけてつがいを作る。越冬地では一羽のメスに数羽のオスがモーションをかけるという。

宮古では旅鳥または冬鳥として飛来するが数は少ない。

⑮ 千鳥足

宮古島で繁殖する唯一のチドリにシロチドリがいる。この鳥は繁殖期に砂地に、おわん状のくぼみを作り、普通、三個の卵を産む。この鳥の歩き方を見ていると小走りに前に進んで立ち止まったり、斜めに向きを変えたりしてジグザグに進む。この歩き方からきている。酔っぱらいの歩き方はまさしく千鳥足である。



写真 24

シロチドリ (チドリ科)

(1984, 1、与那覇湾)

チドリ “つつつ” 君も居場所を 探すのか
伊禮貴子、麻姑山俳句集、1998



写真 25

サシバ (タカ科)

サシバ飛ぶ 未来へ向かって 遠くまで

(平良忠彦、2000) (写真：土井直治、2001)

⑩ 鶺鴒の目鷹の目

ウという鳥は水中で魚を、タカ類は空中で獲物を狙う。このことから、人間が一生懸命になって何かを探すようすを「鶺鴒の目鷹の目」というようになった。ちなみにサシバは約 1,000 メートルもの上空から草むらのネズミ等を見つけることができる。

⑪ トウイの 水ぬんま、ピンザんかいどいふ

鳥は水を飲むが小便をしない、ヤギは水を飲まないが小便をする。この意味は濡れ衣を負うということである (いらぶの自然、仲間明典、1990)。

(6) 俳句・短歌の中の鳥

俳 句

風に乗る ほかなし島の はぐれ鷹 平良 雅景 句集「はぐれ鷹」、2005

軍艦鳥 ながれる方の 碧深し 伊志嶺 亮、旅、2009

一天を 統べ一点の 鷹渡る 伊志嶺 亮、麻姑山俳句会 10 月例会、2019

夕暮や 鷹の大群 なだれ込む 池田 俊男、麻姑山俳句集、第四集、2001

鷹の米 と呼ばれし穂の 立ち上がる 池田 俊男 麻姑山俳句会 10月例会、2019

冬すずめ ぬくぬく並び 暖をとる 岡 恵子、麻姑山俳句集、第四集、2001

うぐいすの 鳴き啼き泣きて 恋を病む 岡 恵子、麻姑山俳句集、第四集、2001

タカドーイ 死語となりゆく デンゴデン 岡 恵子 麻姑山俳句会 10月例会、2019

ひろごりて ゆく哀しみや 渡り鳥 友利 昭子 麻姑山俳句会 10月例会、2019

わが夢に 丹頂鶴のバウンドす 友利 昭子、麻姑山俳句集、1998

むすめを 翔ばす心の 余白夏燕 友利 敏子、麻姑山俳句集、第四集、2001

海鳥の 鳴くや台風 かもしれず 本村 隆俊、麻姑山俳句集、第四集、2001

鷹舞うや 島生き難く 捨て難く 友利 恵勇、麻姑山俳句集、1998

さしば舞ふ 虚空菩薩も 輪の中に 本村 隆俊、麻姑山俳句集、1998

月入れて 鷹の眼となる 通り池 野ざらし延男、1994、天蛇（テインバウ）

短 歌

鷹喰いも 鷹獲りもなき この夕べ まきては渡る 鷹の気高さ 新城森彦、1995

馬の耳 そらせる秋の 風たてば 鷹の渡りを 馬も見ららし 新城森彦、1990

まとめ

- ① 鳥に関わる民話 20 編を収集した
- ② 宮古の民話に出てくる鳥は以下の 13 種類である
鷺（ノスリ？）、サシバ（宮古のサシバ文化、宮古島市総合博物館紀要、第 23 号、2019、参照）、白鳥（サギ類？）、カラス、キジバト、スズメ、ミフウズラ、ズアカアオバト、オオクイナ、ニワトリ、ヒバリ（セッカ）、ツバメ、セキレイ（セグロセキレイ？）
- ③ 民話の中の鳥はそのほとんどが人間生活と密接に関わっている。漁村ではシラサギ類が農村ではカラス、キジバト、スズメ、セッカ等が多く取り上げられている
- ④ 民話の中の鳥を頻度の高い順に並べると以下ようになる。なお、宮古の民話に出てくる白鳥はシラサギ類だと考えられる
白鳥（シラサギ類）4 編、カラス 3 編、キジバト 3 編、セッカ 3 編、スズメ 2 編、ミフウズラ 2 編、鷺（ノスリ？）、ズアカアオバト、オオクイナ、ツバメ、セキレイ類（セグロセキレイ）、ニワトリがそれぞれ 1 編
- ⑤ 民話の内容は「親子の愛情、継母による継子いじめ、ずる賢い鳥、兄弟愛、母親の愛情、知恵比べ、子どもの生理的欲求を抑えて後悔した母親、妻を追い出した男の悲哀、神との約束、親孝行と親不孝」であった
- ⑥ 鳥に関することわざや言い伝えには鳥の習性や生態等がうまく取り入れられている。まさしく言い得て妙である
- ⑦ 鳥をモチーフにした写真、俳句、短歌等もあちこちで発表されている。最も多く登場するのがサシバである。宮古の人たちがこれまで鳥と関わってきた生活、それはまさしく鳥文化と呼ぶのにふさわしい
- ⑧ 鳥の捕獲方法や食べ方にも宮古独特の文化が形成されている
- ⑩ 宮古独特の鳥に関する言い伝えやことわざには必ずカラスが登場する
- ⑪ 宮古島のカラスは 1980～2000 の約 21 年間消滅。しかし、2001 年頃からその数を増やし、現在約 700 羽がカウントされている
- ⑫ 多良間島のカラスは 1972 年頃を境に見られなくなったが、2019 年頃から 1～2 羽の目撃情報がある
- ⑬ 1960 年代、大人は軍鶏（シャモ）で子供たちはスマドイ（雑種）で闘鶏を楽しんだ

謝 辞

この論文を書くにあたり、いろいろと便宜を図ってくれた宮古島市教育委員会市史編さん室の佐藤宣子氏、英文チェックをしてくれた宮古高等学校 ALT の Danielle Newman 先生、資料提供をいただいた多良間村ふるさと民俗学習館、与論民俗村には心から感謝の意を表したい。

なお、この論文の一部は宮古島市市史編さん室、トヨタ財団の支援によるものである。

引用文献

- いらぶの自然編集委員会、1990、いらぶの自然
平良彦一、1951、宮古民謡選集
高良鉄夫、1970?、甘藷害虫防除対策保護鳥獣調査報告書
慶世村恒任、1976、宮古市伝 復刻版
伊良部町、1976 いらぶの民話
多良間村役場、1981、多良間村の民話
宮古民話の会、1984、宮古の民話第四集
宮古民話の会、1989、宮古島の民話第五集
城辺町役場、1990、城辺町史第五巻、民話集
新城森彦、1990、楷の樹
国松俊英、谷口高司、1991、鳥のことわざうそほんど
野ざらし延男句集、1994、天蛇（テインバウ）－宮古島－
新城森彦、1995、郷（さと）の海
久貝勝盛、1998、多良間島・水納島の鳥類、宮古島市総合博物館紀要、第5号
佐渡山正吉、1998、沖縄・宮古のことわざ、ひるぎ社
日独子ども俳句サミット in 宮古島実行委員会編、2000、日本とドイツの子ども俳句集
平良雅景、2005、句集、はぐれ鷹
江副水城（えぞえみずき）、2010、鳥名源株式会社パレード
遠藤庄治、2010、沖縄の民話研究、遠藤庄治著作集、第一巻、p49、NPO 法人沖縄伝承資料センター
宮国昭男、2017、宮古の小噺と綾語について（その2）

